

出張で大阪に向かう飛行機の機内で突然の訃報を聞いてから、未だに実感がわかないままです。学生の頃からいろいろアドバイスを頂き、私が基研に来てからは重イオン衝突の現象論から QCD 臨界点や中性星の物理まで様々な研究を一緒にしていき、気がつけば共著論文の数は大西さんから私からも 2 番目に多くなっていました。学生には懇切丁寧な指導をしていた大西さんですが、ポストドクから見ると仕事を任せつつ、疑問への回答や議論は常にウェルカムで、かつ対等な研究者として扱って頂いていたかと思えます。

一緒にした研究でもっとも力を入れたのが、高エネルギー原子核衝突で 2 粒子相関を計測することによってその粒子間の相互作用を引き出す、現在では Femtoscopy と呼ばれる一連の仕事になりますが、まさにそのような形で進んでいきました。関連するハイパー核の物理や量子力学の散乱理論について、私の素朴で初歩的な疑問にも応じてくれる一方で、私が出したアイデアが良いものだったときには、褒める傍らで「なぜ自分が思いつかなかったのか」と対抗意識を燃やして悔しがっていたのを思い出します。

研究会での発表やこの文章を書くにあたって改めて振り返ってみると、大西さんが実に長期的に物事をみてきていたことに驚嘆しています。大西さんの常にポジティブで、他の人を巻き込みながら研究を進めていくスタイルは様々な良い研究のドライビングフォースとなっていました。私が前述のように些細な疑問の答えを求めて、アポ無しで居室を訪れたときの大西さんは、いつもパソコンに向かって何か細かい計算をしていました。実際、大西さんと行った研究は、大西さん自身によるかなり細かい、泥臭い計算や作業が下敷きになったものも多く、今となっては、本当は全部自分でやりたかったのではないかと想像しています。亡くなる直前の様子を伺ったとき、最後まで現役の研究者であることを貫いたことに敬意を抱くとともに、実に大西さんらしいと納得もしましたが、残念でなりません。

謹んで御冥福をお祈りいたします。

森田健司（量子科学技術研究開発機構）